二〇二四年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修	専修共通問題 （Ｎｏ．１）

【問　題】次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

明治時代の文学者たちの俳諧に対する態度は二義的であった。いま問題にしているのは[1]俳諧であって、俳句ではない。[2]「俳句」と言う概念――言葉ではない――は正岡子規が考案したものである。江戸時代の発句ではなく、一句立ての、おそらくは世界で最短音節の抒情詩という意味である。それは「写生」というすぐれて近代的な文学理論と連動しているのだが、いまさしあたりの問題ではない。明治時代、文学者たちは江戸末期の雑俳流行の延長上にあった。市井の御隠居さんが俳句や川柳をひねりだすというのは日常茶飯事であった。ところが他方では、俳諧を「近代」の眼から見直そうと言う意識も生じる。反応はいろいろであった。

〽古池や蛙飛びこむ水の音

だれでも知っている松尾芭蕉の有名な発句である。正岡子規が明治二十六年（一八九三）に書いた『獺祭書屋俳話』は、この一句がどうしてできたかについてこう記している。「何がな一体を創めて我が心を安うせん」と悩んでいた芭蕉は、「国語は響き長くして意味少き故に、十七字中に十分我所思を現はさんとせば為し得るだけ無用の言語と事物とを省略せざるべからず」と思いめぐらした。さてその折も折「万籟寂として妄想全く断ゆる其瞬間窓外の古池に躍蛙の音あり。自らつぶやくともなく人の語るともなく『蛙飛びこむ水の音』といふ一句は芭蕉の耳に響きたり」と、[3]子規は澄まし顔でいうのである。ほんとうかねえ。

夏目漱石は俳句がうまかった。その漱石が、明治四十年（一九〇七）に刊行した『文学論』の第三編『文学的内容の性質』第一章は、やはりこの一句に言及し、それに禅理を付会するのはまちがった解釈だといっている。禅理だろうが哲理だろうが、それをそのまま表明したものは俳句ではない。「凡そ文学に於ける象徴法は其記号が代表する意義を思索の結果読者に案じ出さしむるにあらずして、之を苦労もなく自然と誘ひ出だすにあり。理窟詰めに之を推論せしむるにあらずして、感情的に連想せしむるにあり」と漱石はいう。たしかにそのとおりである。だが、このとき人口に膾炙した〽古い池や、の一句はほんの事例にすぎなくなる。折口信夫は『江戸時代の文学』（昭和二十五年刊『日本文学啓蒙』のうち）で、いとも淡々と、「芭蕉といふ偶像を破壊させるつまらぬ句である。蛙の句は春である。ぼうとした暖い時に、どぼんと音がしたのといふのだ」と評し去っている。それは余談。漱石の『文学論』の同じ編同じ章は、西鶴のことをこう書いている。「人は云ふ西鶴は文章家なりと、一筆にして情景を活躍せしむと。成程貴意の如くなるべし。然れども西鶴は一筆にて全部を描く以上に緻密なる観察力なかりし男なるを忘るべからず。是固より時勢の科にして西鶴の罪にあらず」と。

話題は一足飛びに井原西鶴には移らない。しばしの間、松尾芭蕉である。『俳諧七部集』のうちの『猿蓑』の冒頭に置かれた『はつしぐれの巻』と呼ばれる歌仙――三十六句構成で一巻をなす連句――の最初はこうである。ちなみに、首句を「発句」といい、第二句を「脇」という。発句はもともと一句立てではなかったのである。

〽鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　　去来
一ふき風の木の葉しづまる　　芭蕉
股引の朝からぬる、川こえて　　凡兆

一句一句の注釈はいまは関係ない。つとに幸田露伴の『七部集評釈』あり。要点は、俳諧連歌は集団制作だということである。数人の連衆がつどい、発句を受けた脇句が、そのイメージを継承しつつ転換する。第三句以下――前句と付句の連鎖――も同じことである。季題とか月・花の定座とかのややこしい決まりはここではいわない。大切なのは、一句ごとに新境地を開いて停頓しないことである。同じ趣向から抜け出せないことを「打越し」という。

二葉亭四迷もまた、俳諧研究に凝っていた文学者のひとりであった。明治三十五年（一九〇二）年から同四十一年（一九〇八）までこまめに記された『俳諧日録』があって、そのなかで二葉亭は『はつしぐれ』歌仙の自注をこころみている。その最初の部分を掲げる。

鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　　去来
（鳶の羽をといはでは聞えず）
一吹風の木の葉しつまる　　芭蕉
（古注に曰発句の前をいひたる也とさもあるべし）一吹風、一陣風発句の景気の補遺とも見るべくや
股引の朝からぬる、川こえて　凡兆

二〇二四年度大学院博士後期課程入学試験問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻 日本文学日本語学専修	専修共通問題 （Ｎｏ．２）

（其人也、前二句の景気に対する人をたつねて股引穿きたる人と定めたるなり其人朝まだき所用ありて川越するをりしもあれ一陣の風颯（さっ）と吹き来て木の葉ざわ立ち鳶も羽を刷しが瞬く間に木の葉もしづまり四辺（アタリ）寂然たる時はら〳〵と時雨きたるなり）

明治三十八年（一九〇五）六月十四日に「注釈卒ぬ」と日記を記しているくらいだから、二葉亭は相当熱心だったのである。歌仙の揚句（最終句）まで完了しているが、当面の話題には冒頭の三句だけで十分である。この注釈で[4]二葉亭は、作家二葉亭四迷でなければしなかったにちがいない勘違いをしている。「鳶の羽も」は「鳶も羽も」としなければ落ち着かないと二葉亭はいう。一陣の風の後にさっと時雨が降りかかり、木の葉が静まり、鳶もまた羽根の乱れをかいつくろったという情景を考えたからである。そこまではまあよいとして、三句目の注釈がいただけない。二葉亭は、「前二句の景気に対する人」を想定して、「股引穿きたる人」を点出している。そしてその人物が「川越するをりしもあれ一陣の風颯と吹き来て木の葉ざわ立ち鳶も羽根を刷しが瞬く間に木の葉もしづまりて四辺（アタリ）寂然たる時、はら〳〵と時雨きたるなり」というシークエンスを思い浮かべるのである。

これでは「打越し」になってしまう。つまり、第三句に前々句を取り込んでいるのである。俳諧連歌はこういう作り方をしない。だからまた、こういう鑑賞の仕方もしない。二葉亭のこの注釈は、期せずして、それがいかに散文小説の読み方に近かったかを如実に示している。俳諧連歌のエッセンスである。切れと移りはここでは無視されている。そのかわりに、一つの「物語」の発端の情景が浮かび出てくるのである。これは西鶴俳諧の読み方にきわめて近いのである。

（野口武彦『三人称の発見まで』より）

問一、傍線部１について、「俳諧」と「俳句」の違いを説明しなさい。

問二、傍線部２について、正岡子規が考案した「「俳句」という概念」について説明しなさい。

問三、傍線部３のように筆者（野口）が揶揄するのはなぜか。その理由を説明しなさい。

問四、傍線部４について、（１）二葉亭の「勘違い」の内容を説明しなさい。（２）なぜ「作家」でなければしない「勘違い」なのか。具体的に説明しなさい。

〈出典〉野口武彦『三人称の発見まで』一九九四年六月、筑摩書房）
本文は、「第三章　散文と人称」より（PP. 72～76）